

会場の外では、レスキューロボットの実演がされた。優勝は「UC Merced」(米国)、

準優勝は「SEU-RedSun」(中国)、3位は「Amsterdam Oxford Joint Rescue

Forces」(オランダ/英国)。

@ ホームリーグ

@ホームリーグでは、家庭を模した環境において必要な技術を競うリーグである。人と対話する技術、人を探して見分ける技術、棚等の上にある物をつかむ技術、人の後を移動する技術、環境の地図を作成し自己位置を推定する技術などの様々な技術について、いくつかのテストという課題を点数化した競技を行う。

テストの内容は、昨年と大きな違いがないものが多いが、ジェスチャーを行うと加点されるなど、一回り難しくなっている。また、フィールド全体の大きさは変わらないのに部屋を細かく仕切ったため、ロボットが移動する経路が相対的に狭くなった。このため、大きめのロボットは部屋間の移動に苦勞する場面が見受けられた。

日本から参加した「eR@sers」(玉川大学、電気通信大学、NICT)は、昨年優勝したときのロボット「eR@ser」に加え、

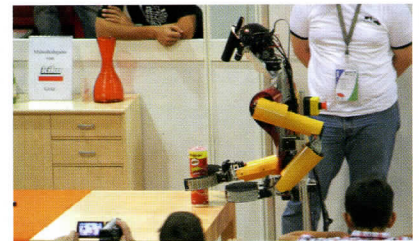
台車にセグウェイを用いた「DAIGORO」を作成し2台でエントリーしていた。このように今年は何らかの形で2台目を用意しているチームが多くなっていった。また、物体をつかむテストが増えているので、マニピュレータを装備したロボットが増えていた。

予選にあたるステージ1からステージ2を通して各テストの得点の合計の上位5チームが決勝に進出した。決勝では、「eR@sers」が、物の動作と種類を学習するというプレゼンテーションとデモンストレーションで高得点を得たが、物体を操作することに加え表情を認識するデモンストレーションを行った「B-bit-Bots」(ドイツ)が総合的に上回り、「eR@sers」は2位になった。優れたロボットに与えられる技術賞は、ヒューマノイドリーグの技術を活用したロボットを作成し決勝でも3位に

なった「NimbRo」(ドイツ)に授与された。「NimbRo」は、オムニホイールとヒューマノイドを組み合わせた2台の個性的なロボットを用意していた。



@ホームリーグ「eR@sers」の「DAIGORO」



@ホームリーグ「NimbRo」

ロボカップジュニア

ロボカップジュニアは、自律型ロボットの製作と競技を通して、未来の科学技術者、さらには科学技術社会を支える市民を育成することを目指した国際的な科学技術教育活動だ。今年の世界大会には、25ヶ国から、サッカー、レスキュー、ダンスの3つの課題(ロボカップジュニアでは「チャレンジ」と呼ぶ)に合計186チームが集まった。日本からは、5月に開催されたロボカップジャパンオープンで選抜された、サッカー10、レスキュー3、ダンス3の計16チームが参加した。

ロボカップジュニアでは、「勝ち負けよりも一人一人が何を学んだかを大事にしたい」という精神を具現化するために、大会運営の仕組みを工夫している。その1つが、スーパーチーム方式と呼ばれる競技形態だ。世界大会会場で初めて会った出身国の違うチーム同士が集まってスーパーチームを作り、団体戦形式や新しい1つのチームとして競技に参加する。言葉も文化も違う参加者が短期間でチームワークを発揮し

なければならない、大変ではあるが、ロボットという共通の話題を通して充実した国際交流が行われている。

また、世界大会ではどのチャレンジでもインタビューが重視されている。これは、チームメンバーが自らロボットを組み立て、プログラミングを行っていることを証明するために行っている。いくら競技でよい成績をとったとしても、チームメンバー以外が組み立てたり、プログラミングしたりしたロボットは失格になる。インタビューは英語で行われるが、英語が苦手なのは日本チームだけではない。ドイツやイタリアのチームでも英語で十分な説明をすることは難しく、チームメンバー以外の通訳が付くことが許されているので、まずは母国語で、ロボットの特徴、どんなセンサーを使っているか、それはどのように動作するか、現在のロボットに至るまでどのように改造を行ってきたか、どうしてそのように改造してきたかなどをしっかりと説明できることが必要だ。これらの質問に的確に

答えるためには、普段から自分の活動を記録したログブックや、ロボットの細部を解説したポスタープレゼンテーションをしっかりと作成しておくと言明に役立つ。



ドイツ、フィンランドのチームとスーパーチームの演技をする日本の「Space Miracle」



サッカーチャレンジに参加した「AMINI」(ハンガリー)